

伊藤整全集

第十九卷

伊藤整全集

19

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野謙
小田切進
奥野健男

伊藤整全集

—19—

© Sadako Itō
1973. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

夏目漱石・森鷗外 他

定価二〇〇〇円

昭和四十八年九月十日 印刷
昭和四十八年九月十五日 発行

著者 伊藤整

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京二六〇一一一郵便番
号一六二振替東京八〇八

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社大進堂

伊藤整全集

第19卷

目次

尾崎紅葉

幸田露伴

坪内逍遙

二葉亭四迷

森鷗外

徳富蘆花

泉鏡花

小杉天外他

島崎藤村

夏目漱石

永井荷風

正宗白鳥

近松秋江

徳田秋声

志賀直哉

八

三

三

四

四

六

八

九

一四

一八

一五

一六

一三

二九

三二

有島武郎

久保田万太郎 他

三木露風

北原白秋 他

石川啄木

萩原朔太郎

室生犀星

百田宗治

葛西善藏

芥川龍之介

菊池 寛

佐藤春夫

宇野浩二

広津和郎

内田百閒

三五

二六

二七

二八

三〇

三〇

三三

三六

三七

三七

三八

三九

四〇

四〇

四六

横光利一

四六

稻垣足穂

四八

岡田三郎

四九

魯迅・ケーベル他

五〇

明治小説・名作集

五一

寺田寅彦他

五二

*

編集後記

瀬沼茂樹 五七

伊藤整全集 第19卷 (評論)

夏目漱石・森鷗外
他

尾崎紅葉

尾崎紅葉（徳太郎）は、明治元年の一年前に当る慶応三年（一八六七）の生れである。幸田露伴、夏目漱石も同年の生れである。明治文学の創始たちのうちでは、坪内逍遙が安政六年（一八五九）生れであり、二葉亭四迷が元治元年（一八六四）、森鷗外が文久二年（一八六二）の生れであるから、紅葉、露伴、漱石の三人がほぼ明治っ子と言ってもいいわけである。

同じ年に生れても、早くから文学に親しみ、文士^{かたず}氣質を身につけた青年ほど、江戸文学の古い殻を身にまとうという結果になっている。紅葉は数え年十七歳で神田一ツ橋の大学予備門に入学した頃から、丸岡九華（久之助）（慶応元年^{一八六五}—昭和二年^{一九二七}）や石橋思案（助三郎）（慶応三年^{一八六七}—昭和二年^{一九二七}）等と文友会というものを作り、自作の漢詩や文章などを小冊子に

筆写して廻読していたほどであるから、江戸末期の戯作類、またその系統の明治初期の作家なる仮名垣魯文（文政二年^{一八一九}—明治七年^{一八七四}）などのものを、少年の軟い心情にかなり多く刻みつけていた。彼よりも三つ年上の二葉亭四迷（長谷川辰之助）は、軍人になろうとしたり、政治に関心を持ったりして外国語学校に学び、日本文学への関心なくしてロシア語でツルゲーネフその他の同時代のロシア作家の作品を読んだあと、明治十八年に逍遙の「小説神髓」を読んでから後、逍遙と交際して小説を書く気になった。しかし、在来の小説の文体を書く自信を持てなかったのに較べると、そこに大きな差がある。二葉亭の方は年は三つ上であるが、文学的年齢においては、遙かに若いと言ってもいい。即ち二葉亭にはロシア文学を通しての人的成熟が先にあって、それを写す必要上、伝統文学の匂のしみついていない口語体を創り出した。内容が先であって文章は後からついて来たのである。紅葉や、彼よりも八つ年上の坪内逍遙においては、文体が先であり、その文体にある思考法が自ら型として打ち出すところの伝統的な江戸時代の文学がつきまとうた。

森鷗外は紅葉より五歳の年長であるが、少年時代から医学校の寄宿舎にいて、貸し本屋の持ってくる古風な小説類を読みふけたと言われるから、その取り入れた伝統文学的なものは、相当の量に達している筈である。しかし彼は

医学生時代には、文士を気取って筆を弄ぶということもなかったようだし、またその学習したものが理論的な近代科学であったし、ものを書き出す前に数年間ヨーロッパで生活をしていたから、ものを書き出した時の彼には、古風な戯作者気質はほとんどなくなっていた。

最も多く伝統的な戯作者気質を身につけていたのは、坪内逍遙であった。名古屋から開成学校の受験に上京したときは、仮名垣魯文の弟子になることを夢想していたほどである。しかし、その逍遙もまた開成学校から東京大学と学生生活を送る間に、ヨーロッパ文学への開眼、近代小説についての論理的な反省をすることによって、少くとも理論的には、近代文学の骨子を身につけたのであった。

以上のように、伝統的な江戸末期の戯作への抵抗と否定と、近代的論理の思考法を身につけた人々、即ち二葉亭、鷗外、逍遙等が、近代日本文学の基礎を作ることになった。それにやや似た事情が、尾崎紅葉と幸田露伴にもあった。それは、淡島寒月との交際による西鶴の発見、そして西鶴の簡潔にして強力なりリズム手法の習得が、二十二歳のとき、ほとんど同時にこの二人の身の上についたことである。西鶴は、徳川末期から明治初年にかけては完全に埋没せる作家になっていた。そして江戸末期には、人間描写の思考法の型としては、滝沢馬琴から種員、種彦に引きつがれ、春水も含むところの草双紙系の物語的なものと、十返

舎一九から式亭三馬を経て魯文に引きつがれた中本系統の笑を含む写実的なものである。馬琴（一八四八年没）や一九（一八三一年没）よりも百五十年以前に死んでいた井原西鶴（一六九三年没）の俳諧手法を根幹とする文体は、それを淡島寒月が発明した明治十年代においては、極めて新奇な文体であり、その圧縮したような写実手法に較べると、江戸末期文が文体のだらしなさによって腐敗していることが対照的によく理解されるような性質のものであった。

尾崎紅葉は、寒月を通しての西鶴との出逢いまでに、同人雑誌における述作体験を五年経ていた。即ち明治十七年（数え年十八歳）文友会を解散し、その年大学予備門に入學したところの小学校時代の友人山田美妙（武太郎）（明治元年—明治四三年）と交際しはじめる。明治十八年（十九歳）には、石橋思案、山田美妙、丸岡九華等と硯友社なる文学団体を結成し、筆写本『我楽多文庫』を発行する。明治十九年（二十歳）、紅葉なる号を創り、『我楽多文庫』第九号から活版印刷とし、川上眉山（明治二年—明治四〇年）、巖谷小波（明治三年—昭和八年）等を加える。明治二十年（二十一歳）、『我楽多文庫』に次々と試作品を発表する。明治二十一年、非売であった『我楽多文庫』を公売にして、五月から改めて第一号を刊行する。この年大学の法科に進む。また美妙が『以良都女』に活躍し、その口語体の作品によって先に世に出て硯友社から遠ざかり、敵視し合うようになる。

そして紅葉はこの年、美妙や二葉亭四迷の「浮雲」などの口語文体に対抗する新しい文体を模索しているとき、西鶴の文体に活路を見出し、その文体によって、翌明治二十二年（一八八九）四月に刊行されはじめた『新著百種』の第一巻に「二人比丘尼色懺悔」を書いて世に出て行くのである。そしてこの年の末には、高田早苗の紹介によって、饗庭篁村（安政五年—大正二年）の去ったあとの『読売新聞』に小説担当の記者として入社するに至り、ここに彼の作家生活の基盤が作られたのである。

「二人比丘尼色懺悔」の巻頭に、彼は次のような言葉を述べた。

- 一 此小説は涙を主眼とす
- 一 時代を説かず場所を定めず。日本小説に此類少し。いかなる味の物かと好色に試みたり。難者あらば。ある時ある処にて。ある人々の身の上譚と答ふべし
- 一 文章は在来の雅俗折衷をかしからず。言文一致のものしからずで。色々氣を揉みぬいた末。鳳か鶏か——虎か猫か。我にも判断のならぬかかる一風異様の文体を創造せり。あまりお手柄な話にあらずといへど。これでも作者の苦勞はいかばかり。それをすこしは汲分て御評判を願ふ
- 一 対話淨瑠璃体に今時の俗話調を混じたるものなり。惟

みるに。これを以て時代小説の談話体にせんと作者の野心

一 前述の通り。世間在来の文とは。下手なりにも趣を異にすれば。読人一見してつらいといふ。作者は少しもつらからず。我つらからざるを人々何ゆゑにつらしといふや。専ら句読をたよりに再読の御面倒を請ふ

月 日

紅葉山人

「二人比丘尼色懺悔」は、戦国時代の捕虜になった武士の身の上に起った二人妻の物語であり、筋には重大性がない。しかし、その地の文には、明らかに西鶴の文体の引き写しのようなところがある。即ち

「麓路に梅香りて。扱は春。窓外の山白うなれば。冬とぞ知る。此処には暦日なく。昼は伐木の音に暮れ。夜は猿の聲に更けて。鐘も鶏も。響かず聞えず。恋する身には此上なき隠れ家に似たれども。愛欲を棄てずしては。一日仮の住居も難し」という文章のうち「。」「点で切って行く方法も、また、連句に近似した句の移しかたも西鶴風である。その上描写の途中に、仏教的な悟りを匂わせるところの「愛欲を棄てずしては。一日仮の住居も難し」というような観念的な言葉をおしはさむところまで西鶴風である。

しかし、対話即ち会話を、行を改めて、歌舞伎の脚本じみた文体で独立させて挿入しているところは、西鶴と違う。

そのため会話体の部分では、西鶴の叙事詩風な簡潔さはその効果を抹殺されて、なまな、安っぽい人情劇のような雰囲気^{きふき}が支配的になる。即ち

「お目覚め遊ばしましたか。只今此のお文^{ぶん}を拝見致し……」
聞くより主は眉を顰^{しりぞ}め。

「文を?」

「この紙帳のお書置」

不注意を悔る主は。呀^あと言ひしまゝ。語^{ことば}は次で出です。

扱^{あつか}は秘する事か。卒爾^{そつじ}なと心付きけんやうに。客も且^{しかば}く遅^{おそ}ひしが。

「このお書置の若葉様とは。あなたの俗のお名で御座りまするか」

この作品は、主人公の青年武士の属する国が、その伯父の属する国と戦う。伯父の娘は彼の許婚者なので、彼は立場を疑われ、同国の娘と結婚する。彼は戦争に敗け、傷つき、伯父方の捕虜となり、自殺する。許婚の娘は尼になって巡礼に出る。たまたまある尼の住居に泊めてもらったところ、そこで見た書き置きによって、それを書いた人が自分の許婚の夫であること、またその宿主の尼が、彼の義理に縛られて結婚した妻であることを知る、というところである。

尾崎紅葉が作家の立場をどのように考えていたかは、赤羽織の谷斎^{こさき}と言われた彼の実父尾崎惣藏^{そうざう}に対する態度によって、最も端的に知ることができる。尾崎惣藏ははじめ商人であるが、長男徳太郎即ち後の紅葉が六歳のとき妻の庸^{よう}が死去した頃から身を持ち崩し、幫間^{へい間}となり、赤い羽織を着て銀座を歩くというような存在になった。鹿の角の彫りものを得意にしている、彫物師^{ていぶし}のようなところもあったが、職業は明らかに幫間であり、彫りものはその芸の一つであった。明治十年前、仮名垣魯文が新聞の編集長兼小説家として第一線の存在であった頃、魯文の『仮名読新聞』の創立祝には芸者などから贈られた幟^{しほ}を社の表に立てるような習慣があり、役者、芸者、文士は芸能人として共通の小社会を形成していた。従って魯文は谷斎と友人としての交際があり、魯文の書画売立て会などには彼も来会したことが記されている。

即ち幫間は小説書きと対等の交際をするものであった。事実上江戸末期の風潮においては、漢詩や漢文でものを書く武士系統の文人とはっきり区別されていたところの町人系の戯作者は、趣味を解する金持ちたちの取り巻きであり、幫間と同じ身分のものであった。だから魯文にとっては、幫間と交際するのは当然のことであった。しかし明治二十一年、数少い東大の学生として小説を書いて世に出た紅葉に取っては、幫間を父として持つことは、恥ずべきことであ

った。彼は有名な赤羽織の谷斎が自分の父であることを硯友社の仲間にもひたかくしにしてい、皆がそれに気づいているのに、一度もそれを自分から言い出さなかった。その上彼は武家の系統である江見水蔭（忠功）（明治二年—昭和九年）^{（一八六九—一九三四）}に向つて、あるとき、父のことをそれとなく暗示しながら、本当は自分は君たちと交際もできないような身分のものだ、と洩らしたことがあった。そして何か事があつて紅葉の家へ谷斎が現われる時には、俚に深く幌をかけて、人目につかぬようにさせた、ということも水蔭は伝えている。そして紅葉が身内として公然と友人に示したのは、幼少の頃から育てられたところの、漢方医の祖父荒木舜庵であつた。

このような、魯文と紅葉の考え方の相違から見て、明治二十年頃に、文士という身分の社会的地位が著しく変化したことが分る。それは、その少し前の明治十八年、東京大学の卒業生のみが許されていたところの文学士なる称号を持つ坪内逍遙が「当世書生気質」を書いて世評が高かつたとき、福沢諭吉が『時事新報』で、文学士ともあるうものが小説を書くとは何事か、と言つて糾弾したと伝えられるように、坪内逍遙が小説家となつた時に起つた身分の変革であつた。紅葉は逍遙の樹立した文士の社会的地位を自覚して、肉親の父を身辺から遠ざけ、それを認めることを拒否することによつても、その地位にふさわしく生きよ

うとしたのである。

その点で紅葉は文明開化の明治の人であつた。しかし、これは明治六年に、町人から武士の階級に上つたような氣持で、一流の文士仮名垣魯文が神奈川県庁の役人になつたのと似たところの出世主義に近いものであつた。階級は彼の心内に厳存し、彼から見た弟子というものは、彼が病氣をした時に足の指の爪を切らせて然るべき存在であつた。紅葉の尊重したのは階級的に一つ上位の紳士としての文士であつて、人間性自体の体现者としての文士ではなかつた。それ故、彼の死後自然主義者たちは、もう一度紳士たる文士の立場から、無法人であり、好色漢たることを自認する世捨人的な文壇人となることによつて、かえつて眞の人間性を確立し得たのである。

そのような精神構造を持つていた紅葉が二十三歳のときに書いた「二人比丘尼色懺悔」の叙事文体において西鶴をいかに綿密に真似たとしても、四十歳になつて、世の中をほとんど見尽したという諦念を持つて小説を書き出した西鶴の、人間を見る透徹さやその判断の冷酷さを身につけなかつたのは当然である。「色懺悔」は紅葉自身が、「涙を主眼とす」と言つてゐるとおり、戦国時代の武士道の形を借りたロマンチックな青春期の純情物語である。彼の競争相手であつた山田美妙の「武蔵野」以下の諸作にある一種の残忍な非情性というものに較べられる強い線が彼の作品に

はなかった。「色懺悔」においての人間感情の処理の仕方は、自殺する主人公の小四郎が、その最期の回想において、武士としての立場、許婚者を裏切ったものとしての立場のために、義理のある伯父、伯母の親切を無にせざるを得ないことを歎き、許婚者の芳野の心に添えなかったことを歎き、しかも妻の若葉の愛を忘れることができないことを歎く、という形のものである。義理の対立のみが彼に強く意識されていて、小四郎が若葉と芳野のいずれを本当に愛しているかははっきりしないのである。作品の中で相争い、対立しているものは、各人物の立場と義理とである。当の若葉と芳野すら、小四郎の死後に相逢って、姉妹として親しみ合うことを簡単に誓い合っている。そこには、真の憎悪もなく真の愛着もない。

このような封建社会の悲劇の描き方を、コルネイユの「ル・シッド」などに較べると、封建制度に対する人間的抵抗の強さにおいて、近代文学の実質をほとんど備えていない、と言ってもいい。ただ一つこの作品においての新しさとして取るべきことは、時代小説の中の人間として、小四郎が武道一点張りではなく、傷ついた上のことではあったが、敵方の伯父に捕虜になり、肉親としての温情を受け容れたことである。それも、作者の見た人間性の温かさの主張というよりは、小説の筋を、小四郎と芳野の再会という場面に持つて行くための手段にすぎないのである。明治二

十一、二年の頃は、急激な欧化主義に対する抵抗としての復古趣味が日本の社会に起りかけたときであり、二葉亭四迷や山田美妙の新文章創造に対する疑問が次第に表面化した時であった。その情勢の反映の中で、この作品が彼を文壇に登場させたという意味を抜きにすれば、尾崎紅葉が西鶴に学んで、江戸末期の低俗性を洗い去った新文学を作り出した、とは、決して言うことができない。

しかし尾崎紅葉は、そのあと、更に西鶴的な文体で書き続け、その間に次第に西鶴的思考法を体得して行った。明治二十三年の春、彼が数え年二十四歳の時に、新しく与えられた最上の発表舞台なる『国民之友』新年号に書いた短篇「拈華微笑」は、無愛想な男が思いがけず美女に愛されていながら勘ちがいしてその愛を失う筋である。またその年の末に彼が『新著百種』の号外として発表した「巴波川」は、主人公に愛された女が癩病の系統であるという怖れのために自殺する筋である。ともに短篇としての結末の面白さを生かすことに目標をおいたものらしく、文体においても、その考え方においても平凡なものである。しかし、この二作の中間に、その年の七月に『読売新聞』に連載した「伽羅枕」は、佐太夫という名の一侠妓の生れから晩年までの恋愛や男女関係を、一つの系統づけとして書き進めたもので、これはその方法においてもテーマにおいても、西鶴の「一代女」を連想させるものであり、意識的にその

文体を使ったという点で目立っている。この作品はモデルがあったと言われているが、具体的な事実の積み重ねに力を入れ、感情の描写を抑制しているところなど、西鶴的手法において、紅葉が大きな進歩をしたことを語っている。しかし、西鶴的手法を意識しすぎたためか、彼独自のものの創造という点では見るべきものがない。

明治二十四年、数え年二十五歳の時、紅葉は注目すべき作品を書いた。雑誌『都の花』に連載して翌年に及んだ「二人女房」である。美しい姉嬢がよい身分の男と結婚して不幸になり、醜い妹嬢が平凡な男と結婚して幸福を得るという、常識を裏がえしたような作品である。この作品を、紅葉は西鶴ばりの文章で書き進めたが途中から、「である」止めの口語文体に移行したので、首尾一貫しないものとなった。それは、美妙や二葉亭との競争意識に駆られたというよりも、題材が現代の家庭生活であり、日常的な現実の描写が自然に口語体へ彼を追いやったものと言うべきであろう。美女の不幸、醜女の幸福という話の推移も、常識の裏返しという以上の深い意味はなく、努力にふさわしい強い感銘を与える作品とはなり得なかった。

紅葉はしかし、まだ、西鶴の手法の追求をあきらめていなかった。翌明治二十五年、彼は数え年二十六歳になった。三月から彼は「三人妻」を『読売新聞』に連載した。これはある新聞記事に材を得たと言われているが、それは、単

に人物の組み合わせについての着想にとどまっていたらしい。各人物の性格、それぞれの境遇などは、紅葉自身の考案になるものようである。大原余五郎という一代で産をなした四十五歳の男がいる。その妻は娼妓あがりの品格のない女であるが、余五郎が富豪になり、幾つもの会社を経営するようにになると、自然に家庭の経営、世間の体面、目下のものの扱い方などに心を使い、寛大な気持で夫の女狂いをゆるすようになっていく。夫婦の間には小学生の娘しかないので、男の子をほしいと余五郎は思っている。

余五郎は、男嫌いと言われる柳橋一の美しい芸者である才藏（お才）を追いまわし、お才が隠している愛人の菊住を、別な女を使って誘惑させ、お才を妾として囲う。同じ金持ち仲間なる雪村が政治家や官吏を籠絡するために隅田川のほとりの別荘を使い、そこに多くの女を養っているが、あるとき余五郎はそこでお角という美女を見出し、それに熱中する。お角を譲ってくれと彼は雪村に交渉するが、お角と関係がある雪村はそれを承知しない。余五郎はお角に言いふくめて、ひそかに彼女をそこから連れ出し、深川辺に囲ってしまう。雪村は仕方なくあきらめる。

余五郎は母の年忌のために、年とった父一人が残っている田舎へ行く。彼は青年時代に愛着した金満家の娘があったが、その娘の一番下のお艶という妹が、二十四歳になって琴の師匠をしているのに逢い、その女に執着する。部下